

1.	今年度の活動概要	大滝 雅史	2
2.	夜回り活動	澁谷 洋平	5
3.	炊き出し・相談会	中西 将人	8
4.	今年度の調査について	中村 江里加	11
5.	広報活動	新川 拓哉	14
6.	寄せ場交流会の報告	池内 未希	17
7.	北星学園での学習会	池内 未希	19
8.	他団体との連携	今 加菜実	21
9.	来年度以降に向けて	大滝 雅史	26
10.	私と労福会		28

1. 今年度の活動概要 - あいさつにかえて -

当会の活動が始まったのはもう9年以上も前です。

会の結成当初を知るスタッフは、卒業・就職などですでに札幌を離れているか、すでに活動から退いている人がほとんどです。これを書いている私（大滝）自身も、この活動にかかわりだしたのは一年と半年ほど前で、活動当初のことは話に聞くのみです。

しかし、過去の資料を見る限り、昔も今も方針に大きな違いはないように思います。

野宿者の直面している問題に直に関わり、それを通して自分達に何ができるのか、そして社会の姿とはどうあるべきなのかについて考える、ということ。もし、社会のセーフティネットが整っており、暖かい人間関係があれば、野宿という生活を強いられるようなことはないはずです。野宿者は必ずしも怠けていたことによって野宿状態に陥ったのではなく、あくまで社会の中に潜む矛盾が可視化された存在にすぎません。当会は、野宿者の問題に関わりながら、「野宿という状態は誰にでも降りかかりうるもので、決して他人事ではない」という立場から考え続けてきました。

そうした意味で、今年は貧困問題に取り組む団体としても、大きな変化の年でした。

米証券会社リーマン・ブラザーズの経営破綻（いわゆるリーマンショック）から深刻化した金融危機は日本にも大きな影響をもたらし、「派遣切り」に象徴される非正規労働者の問題は社会問題となりました。そして、連日こうした派遣労働者や野宿者などの問題がメディアによって大々的に報道されたためか、貧困・労働問題への世間の関心はかつてないほど高まりました。当会でもメディアの取材を受ける機会や、市民の方からの援助の申し出を受ける機会が増加したことは、そうした状況を反映していると考えて間違いはないでしょう。

また、その流れも影響して、前々から指摘されていた当会以外の当事者支援団体とのネットワークづくりも、少しずつではありますが前進したということも指摘できます。そのため、今年はこの数年でも、当会のような支援団体を取り巻く状況が大きく変化した年として記録することができると言えるでしょう。

今年度は、基本的には昨年度までに積み重ねてきた活動内容の踏襲からはじめ、その中で突き当たった不足や必要に応じて、内容を調整していこうという方針で行ってまいりました。それは、これまでの夜回り、炊き出しといった活動を引き継ぎながらも、その活動の中での問題点や課題などと向き合うことで、これからの活動のための足場を確かにするような作業であったと思います。いわば、来年度以降の活動のための踏み台を用意したとも言えるかも知れません。

そして、それは当会が近年「新しい活動」（活動の進展）を求めるなかで、重要であるにもかかわらず置き去りにしてきたものを再点検し、そこに不備があれば補っていかう意志によるものでした。不備とは、例えば「学生主体の団体」であるにも関わらず、学

内広報が不十分であった事や、また「考える会」としながらも意見交換や考察を深めるための場である学習会などを定期的実施できていなかったことなどが、昨年度の問題点としてありました。

今年度は、そうした事態への対策として、例えば北星大学で定期的に学習会を行ったり、北大構内において当会のチラシを掲示板に掲示したり、ボランティア相談室などに置いていただくなどしました。ほかにも、夜回りの集合場所を変更したり、公式ホームページの他にブログを作成して、活動状況を報告するといったことも行いました。

詳細については、本編で触れているのでここでは省きますが、こうした調整によってスタッフ獲得のために奏功したことは今年の成果と言えるでしょう。

表 1.1 : 2008 年度 活動スケジュール

2008 年

5 月	6~7 日	第二回ホームレス支援全国ネット総会・研修会（大阪） に参加
5 月	9 日	自由学校「遊」での講演
5 月	17 日	札幌市と民間団体の意見交換会
5 月	24 日	全国ネット参加者による報告会
5 月	31 日	炊き出し・総合相談会
6 月	22 日	なんもさサポート三周年記念シンポジウム・見学会
6 月	28 日	炊き出し・総合相談会
7 月	7 日	オルタナティブサミット（市民サミット）で講演
7 月	12~13 日	全国・地域寄せ場交流会（名古屋）に参加
7 月	26 日	寄せ場交流会参加者による報告会
8 月	3 日	炊き出し・法律相談会
9 月	13 日	夏期 ホームレス概数調査
9 月	7 日	札幌市と民間団体の意見交換会
9 月	27 日	炊き出し・総合相談会
10 月	10 日	北海道と民間団体の意見交換会
10 月	25 日	炊き出し
11 月	29 日	炊き出し・法律相談会
12 月	7 日	映画「あしがらさん」上映会（自由学校「遊」主催）
12 月	21 日	クリスマス朝回り

2009 年

1 月	19 日	概数調査 事前打ち合わせ（市役所）
1 月	24 日	冬期 ホームレス概数調査
2 月	28 日	炊き出し・総合相談会（かでの 2・7）
3 月	14 日	北星学園 拡大学習会
3 月	28 日	2008 年度総会

上記の他、毎月第 1・3・5 土曜日に、会議・及び夜回りを行いました。

2. 夜回り活動

2. 1. 夜回りとは

当会の主要な活動の一つとして、『夜回り』というものがあります。

具体的には、毎月第一、第三、第五土曜日の 20 時に、札幌駅南口のアピアドーム(10 月末まで大通駅の改札前)に集合して、札幌駅、大通、狸小路などの野宿者の多い地域を中心に回っています。回る際には、缶コーヒーやパンなどを持っていき、配りながらお話を聞きます。当会の活動を知らない野宿者がいたときのために、活動を紹介したチラシを用意しています。また、近日中に炊き出しが開催される場合は、その告知もしています。

夜回りをする際は、当日集合したスタッフの人数に応じて、数人ずつのグループに分けて回る場所を分担しており、その際は、なるべく毎回同じ人が、同じ場所の担当になるようにしています。そうすることによって、野宿者とスタッフの信頼関係を築くことができ、初めて会う野宿者と毎回会う野宿者を見分けることもできるからです。

また、夜回りは継続的に行うことが大切な活動です。継続的に夜回りを行うことによって、野宿者の方々と仲良くなることができ、信頼関係を築くきっかけにもなります。夜回りを行った後に、「あの人は元気になっているのか?」、「またあのおじさんと話をしたい」などの意識が生じて、次の活動に参加する意欲が高まることもあります。

野宿者の中には、色々な話をしてくれる方、物資を受け取らない方、あまり話をしてくれない方など、さまざまな方がいます。定期的に会いに行くことによって、話をしてくれなかった方が心を開いて話してくれるようになって、より深い話をしたり、相談を受けることもあります。当会との付き合いが長い方々もいて、夜回りの時間に合わせて顔を見せに来てくれる方もいます。

2. 2. 拡大夜回り

普段の夜回りでは回らない地域へ行く、拡大夜回りも行っています。これは、当会の存在を知らない野宿者の方々に話をしに行ったり、郊外にいる野宿者の情報などを得るために行っているものです。普段回っている場所に加えて、地下鉄、JR 沿線などを回り、駅近くのスーパーや、駅員への聞き取りを行いました。さらに、人数調査の事前調査としても行いました(人数調査のページを参照)。今年度は夜回りの参加スタッフが昨年度より増えたので、拡大夜回りを 4 回行うことができました。その結果、環状通東、新道東、宮の沢、北 24 条、平岸、南平岸、桑園で、野宿者の存在を確認できました。まだまだ回っていない地域もあるので、今後それらの地域に足を運び、支援の幅を広げていくことが望まれます。

2. 3. 課題と展望

最後に、来年度に向けての課題についてです。

まず、今年度は参加人数の増加が問題となりました。表 2.3.1 にもありますが、参加人数が 20 名を超える日が 7 回ありました。札幌においては、野宿者の人数やいる場所が限られているため、参加者が増えすぎると、一つの班のスタッフが多くなりすぎてしまい、逆に活動に支障が出るということさえあります(一つの班の適正人数は 4 人程と考えています)。

例えば一つの班の人数が増えてしまえば、野宿者との関わりも相対的に薄くなってしまいますし、一人の野宿者を取り囲むような形での会話では、野宿者自身も萎縮してしまいます。また、活動の際の注意点などを十分に伝えられないまま参加することによって、「消化不良」のまま終わってしまうおそれもあります。つまり、「ただ活動に参加するだけ」という主体性の欠如した関わり方になってしまうということです。

こうした参加人数増加については、夜回り自体を行う回数を隔週から毎週に増やすという案や、定期的に拡大夜回りを行うという案などを検討中です。

こうした状況は、一見逆説的ですが、中心的に関わるスタッフの不足とも関係しています。当会の活動において、役職を担ったり、会議に出席する中心的なスタッフは夜回りの人数増加とは比例せず、あまり増えていません。そのため、夜回りなど、実際の活動に参加する人数が増えていく一方で、会の中心となって運営にまで関わるスタッフが増えていかなければ、事務的な仕事量の分散はできず、運営をしていく上での困難を招いてしまうのです。

これは、夜回りに限らず、当会自体が抱えている問題です。そのため、一つの対策としては頻繁に活動に参加しているスタッフが、比較的経験の浅いスタッフに、積極的にアプローチして中心的に関わっていくように促すのが望ましいでしょう。また、同時に広く参加スタッフの意見を取り入れながら、会のあり方を考えるようにしたいと考えております。

表 2.3.1 : 夜回りの参加人数と会えた人数

日付	参加人数 (人)	会えた人数 (人)
4/5	17	44
4/19	15	21
5/3	15	28
5/17	16	40
6/7	26	36
6/21	18	39
7/5	16	33
7/19	16	33
8/2	14	30
8/16	18	38
8/30	18	40
9/6	18	42
9/20	22	39
10/4	18	35
10/18	20	36
11/1	21	32
11/15	28	42
12/6	18	39
12/20	19	36
1/3	16	44
1/17	21	43
1/31	16	47
2/7	6	46
2/21	20	48
3/7	11	41
3/21	10	48

※灰色の部分は、拡大夜回りを行った日です。

※参加人数は、ML上で報告された数字で、夜回り解散時に数えた時のものもあります。

3. 炊き出し・相談会

3. 1. 炊き出し

当会では年に数回、各種団体と共催で各種相談会を兼ねた炊き出しを行っています。

来場者に少しの間だけでも暖かくくつろげる場を提供するとともに、スタッフと信頼関係を築き、自立への可能性を探る手伝いをするを目的として行われます。また、初めて活動に参加する人が当会の活動や野宿者の実態を知る良い機会にもなります。

今年度炊き出しは計7回行いました（下表 3.1.1 参照）。

表 3.1.1：炊き出し・相談会実施概要（2月以外はアウ・クル体育館にて実施）

	日時	来場者数	特記事項
総合相談会・健康診断	5月31日	51	共催：札幌市、ハンド・イン・ハンド 健康診断受診者12名
総合相談会	6月28日	55	共催：札幌市、ハンド・イン・ハンド 健康診断の結果返却、散髪
法律相談会	8月3日	47	共催：札幌司法書士会 法律相談5名、散髪
総合相談会・健康診断	9月27日	61	共催：札幌市、ハンド・イン・ハンド 健康診断受診者12名
総合相談会	10月25日	48	共催：札幌市、ハンド・イン・ハンド 健康診断の結果返却、ビンゴ大会、散髪
法律相談会	11月29日	52	共催：札幌司法書士会
ホームレス総合相談会 (かでの2・7)	2月28日	58	協力：勤医協、札幌司法書士会、なんもさサポート 健康相談5名、法律相談3名

今年度の来場者数は2007・2006年度を下回り2005年度と同程度となっています。人数調査によれば、札幌市における野宿者の人数は減少しているとの結果が出ていますが、昨今の状況を踏まえれば来年度は増加する可能性も十分あります。

3. 2. 食事・物資の配布

おにぎり、豚汁などの食事や、タオル・歯ブラシ・カップ麺・石鹸・靴下・カミソリ・風呂券（北海道公衆衛生浴場協会加盟銭湯全てで利用できる回数券）・衣類などを配りました。この他に、各テーブルに菓子類も置いています。

食事については、基本的にハンド・イン・ハンドの提供を受けましたが、2月は当会スタッフがレッツ中央で調理したハンバーグ・ポテトサラダなどを提供し好評を博しました。今後も単独開催の回には当会スタッフ自ら調理することができればよいと考えています。

3. 3. 相談会（他団体との協力）

5、6、9、10月の炊き出し・総合相談会はハンド・イン・ハンドとの共催で行われ、食事の提供や衣類の配布といった点で充実させることができました。またこれらの炊き出し・総合相談会は札幌市との共催でもあります。5、9月には、区役所職員による生活・福祉相談や、ハローワーク職員による就労相談、札幌弁護士会による法律相談、札幌こころのセンターによる精神保健相談など幅広い分野での相談が行われ、加えて健康診断（検尿・血圧測定・血液検査・X線検査）も行われました。そして、6、10月にはその健康診断の結果が配布されました。

8、11月には札幌司法書士会と共催で炊き出し・法律相談会が行われました。生活保護に関係する寸劇・クイズなどが行われ、野宿者と共に知識を深めました。

12月の炊き出しは勤医協による健康相談、札幌司法書士会による法律相談、なんもさサポートによる食事の提供がそれぞれの団体の協力により行われました。

3. 4. その他のサービス、企画など

相談会の場では、理容師によって各回15名程度の来場者の散髪が行われています。待ち時間や、散髪の間にも来場者と話をすることができ、コミュニケーションを深める良い機会にもなっています。

また、10月の炊き出しでは、来場者との交流の一環として恒例の「ビンゴ大会」を開きました。普段は、食事をし終わるとすぐに帰ってしまう来場者が少なからずいますが、ビンゴ大会を行った回は多くの方がそのまま会場にとどまり、スタッフとのコミュニケーションを深める機会ともなりました。

当会設立10周年を迎える今年度はビンゴにとどまらず、楽しい雰囲気をつくることのできるような企画を考え行っていきます。

3. 5. 会場について（かでの2・7の利用）

冬季は会場としてアウ・クル体育館が防災の都合上利用できないため、2月はかでの2・7を利用しました。中心部に近く便利であり、ブルーシートを敷くなど設営の手間もなく、ポットも借りることができ、さらに暖房効率もよいなどの利点がありました。しかし、来場者した野宿者が待機する場所がなく、通り道である会場の廊下をふさいでしまったために、他の部屋の利用者から苦情を受けてしまいました。次回以降は、こうした課題を踏まえながら、会場決定をする必要があると考えられます。

3. 6. まとめと展望

昨年度多くの要望がありながら実施できなかった冬季の炊き出しを今年度実施できたことは大きな前進です。

炊き出しでは生活保護申請付き添いを受け付けましたが、一回の相談会で一人も希望しない回も多くありました。炊き出しは、夜回りではなかなか行えない十分な時間を割いた聞き取りを行うことによって、生活保護申請に繋げる重要な機会だったことからすればとても残念なことです。

今年度、スタッフの急増に対応することで精一杯だった現状を乗り越え、来年度は支援の質の向上を図り、以て実効的な野宿者の自立支援を行わなければなりません。質の向上は長年の当会の課題でもあり、そのための努力が一層求められています。

4. 今年度の調査について

街が静まりかえっている時間帯に、野宿者はどこにいて、どのように時を過ごしているのでしょうか。野宿者の実態を知ることは、よりよい自立支援活動を行う上で重要なことです。当会では、野宿者の概数を把握するための調査を毎年行っています。この調査は、第一に、札幌市のどの場所にどの程度の人数が路上で生活しているのかを把握することを目的としています。第二の目的は、普段の夜回りでは遭遇することのない、野宿者の様子を知ることです。さらに、普段の夜回りでは札幌市中心部しか回れませんが、範囲を拡大した人数調査では、郊外にいる野宿者の様子も知ることができます。

今年度、当会は野宿者の人数確認調査を夏（9月13日）と冬（1月24日）の2回行いました。年2回の調査実施には、①調査時期にばらつきのある他年度との比較を行いやすくする②夏季と冬季の間で、場所・人数・様子にどのような違いがあるのかを比較する、という狙いがあります。

4. 1. 調査概要

今回の調査では、これまで行ってきた調査結果や夜回りなどの活動で集めた情報をふまえて、調査範囲を札幌駅周辺、大通・狸小路付近、豊平川河川敷、市内主要公園、地下鉄沿線など11方面に分けて調査を実施しました。調査開始時間は、野宿者がまだ寝ていて移動を始める前の早朝4時頃としました。調査は、スタッフが2人1組になり担当場所を回り、目視で性別・年齢等を確認していきました。

今年度の調査参加スタッフの人数は、夏季38名、冬季37名でした。

4. 2. 事前調査について

事前調査とは、人数調査に先駆けて調査予定地に向かい、実際に野宿者がいるのかを確認するものです。このような事前の調査は、より正確な調査結果を得るために必要であり、前年度に残された課題でもありました。具体的な調査方法は、調査予定地を見て回ることに加えて、周辺の24時間営業店舗で話を聞き、特に地下鉄沿線では駅員や売店の店員に野宿者について尋ねます。このような確認によって、より正確な調査結果を目指すことと同時に、人数調査当日の段取りをより無駄のないものとし能率を上げることができました。

4. 3. 夏季調査について

夏季調査は、例年通り当会独自に調査を行いました。調査参加者については、当会のメンバーほかになんもさサポート、さっぽろ自由学校「遊」の方々を始めとして多くの方に

ご協力いただいたこともあり、計 38 名で調査を実施しました。

調査班については、11 方面 13 班とし、班の人数としては、中心部以外の班が使用可能な車の提供が 9 台あったことから、それらの班は 3 人とし、調査で車を離れる際に 1 人車内で待機できるようにしました。また、調査方法・内容としては、①集合は 4 時とし、各班調査終了後は班責任者のみ集合して報告を行い、②調査表にメモ欄を設け、気になったことを記載し、③荷物のみがある場合にはそれをカウントしてメモ欄に記入しました。

終了後の反省において、調査を円滑に、より正確に行うためには、班分けにおいては各人が詳しい地域を担当すべきであり、担当者はそれを事前にある程度把握しておいた方がよいこと、天候によって概数に変化があるので、調査担当者は記録に残しておくべきであること、過去の調査記録がきちんとまとまっておらず、担当者が過去の調査を把握しにくいこと、などの意見が出されました。

4. 4. 冬季調査について

冬季調査（1 月 24 日）は昨年度に引き続き厚生労働省から委託された「ホームレスの実態に関する全国調査」の一環として実施しました。

午前 4 時には深夜の居所を離れてしまう野宿者もいるため、今回の調査では調査開始時間を見直しました。午前 3 時 30 分にスタッフが札幌駅前に集合して、午前 4 時前に各班が調査地に到着することを目標としました。当日の天候は、気温は低いとしても荒れることなく、調査に著しい影響はありませんでした。

今年度の冬季は、前年度と同様に、夏季と比べて人数が減っています。これは冬に路上で寝泊まりする人は少ないということが原因であると考えられます。しかし、それにも関わらず、今回郊外で確認された野宿者の人数は、前年度夏季調査に次いで最も多いという結果になりました。調査結果からの分析については次項で詳しく述べますが、郊外での野宿者増加は雇用環境の悪化を想起させます。また、調査結果から、札幌市郊外における野宿者支援について当会でも考えていく必要があるということを改めて認識しました。

4. 5. 調査結果から

調査結果からわかることは、相変わらず札幌には 100 人程度の野宿者がいるということです。今年度は夏季・冬季を通して、前年度調査より確認された野宿者の概数が減少しています。人数調査はあくまで概数を示すものであり、正確な人数ではないかもしれませんが、野宿者の人数が減っていることは、当会をはじめとする支援団体や札幌市の働きかけが実を結んだ結果として評価することができます。一方で、100 人程度という数字には変化がないことから、新たに野宿者になってしまう人や、路上生活から脱しても再び野宿者になってしまう人が確実にいると考えられます。

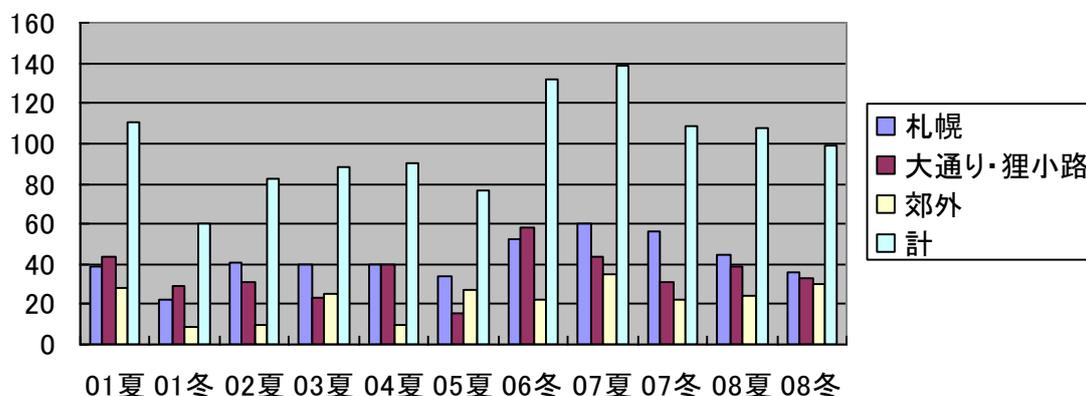
特に 2008 年秋以降、世界的な金融危機と時を同じくして、道内でも雇用環境悪化が現実味を増してきたため、冬季調査では札幌市の野宿者の人数増加も予想されました。しかし、2008 年度冬季の概数全体(99 名)はひと時の冬季調査と比べて若干減少しています。では、金融危機と騒がれる時流とは裏腹に、札幌市では雇用悪化の影響がまだ表れていないのでしょうか？事態はそれほど深刻ではないのでしょうか？事実はそのようではなく、おそらくこの結果から漏れている、「潜在的な野宿者」が相当数いるであろうことが原因であると思われます。なぜなら、住居を失ったばかりの労働者は、その日から極寒の札幌の路上で夜を明かすとは考えづらいからです。札幌市でも住居を持たずインターネットカフェや 24 時間営業のファーストフード店などで夜を過ごす人が増えている可能性は十分にあります。

いずれにせよ、夏冬問わず、札幌の野宿者は普段人目につかないところに居ることが多く、探し出すだけでも困難です。また、見かけだけでは野宿者とはわからない場合もあり、目視による調査では限界があります。よって、実際には調査結果よりも多くの野宿者がいると考えられます。より正確な調査結果を得られるよう、当会ではインターネットカフェや 24 時間営業店舗における調査も検討中です

表 4.5.1：年度別ホームレス概数調査結果

	01 夏	01 冬	02 夏	03 夏	04 夏	05 夏	06 冬	07 夏	07 冬	08 夏	08 冬
札幌	39	22	41	40	40	34	52	60	56	45	36
大通り・狸小路	44	29	31	23	40	16	58	44	31	39	33
郊外	28	9	10	25	10	27	22	35	22	24	30
計	111	60	82	88	90	77	132	139	109	108	99

図4.5.2: 調査結果推移



5. 広報活動

当会における広報活動は、主に定期発行物（会報）、公式ホームページ、各種講演会、の三つに区分されます。また、その他の活動として、ブログ、テレビ出演などがあります。

5. 1. 広報活動の目的

広報活動は、当会の活動についての情報を社会に発信することにより、市民の野宿者問題に対する関心を高めることを目的としています。

会報と公式ホームページは、なんらかの事情により活動に参加できない会員に対する情報公開と、会内部における情報の共有も目的としています。また、各種講演会は、野宿者問題に関心を持つ学生ないしは市民に向けて、野宿者問題に関係する知識を提供する教育的な役割も担っています。

また、ブログは公式ホームページの補助的な役割を果たしています。そして、テレビ出演は各種講演会の補助的な役割を果たしています。

5. 2. 今年度の広報活動内容

- i 会報発行（「ともに生きる」第十七号）
- ii 公式ホームページ運営（<http://roufuku.org/>）
- iii 各種講演会（表参照）
- iv その他の活動（5.2.1 参照）

表 5.2.1 : 各種講演会

日付	担当者	場所	対象
4月21日	長谷川	北星学園大学	公的扶助論(木下先生)の受講生
4月28日	大滝, 今, 長谷川	北海学園大学	基礎ゼミ(川村先生)の受講生
5月9日	長谷川	さっぽろ自由学校「遊」	「札幌のホームレスを知る」調査の参加者
5月26日	今, 長谷川	札幌学院大学	社会保障法(嶋田先生)の受講生
5月28日	長谷川	北星学園女子中学高等学校	全校生徒
7月7日	大滝	オルタナティブ・サミット	「国内から世界は変えられる」ワークショップ参加者
10月10日	長谷川	北海道大学	政治学入門Ⅱ(中島先生)の受講生

5. 3. ブログ、テレビ出演について

当会ではホームページはあるものの、あまり頻繁に更新がなされませんでした。そのため、過去の情報がいつまでも掲載されているなどの事態が起こり、「活動しているのか、していないのかよく分からない」といった意見が寄せられることが多くありました。また広報活動においては、会の歴史や活動内容といった、頻繁に更新する必要のない情報とは別に、最近の活動報告やイベント情報など、定期的な更新を必要とする情報を提供することが重要であるということも事務局会議で話し合われました。そのため、ホームページとは別に、定期的な情報を紹介するのに適したブログ形態のページを新しく作成するということが会議で決定し、2008年7月に開設されました。

(「sapporo 路上通信」 <http://roufuku6029.blog95.fc2.com/>)

このページは事務局長の大滝によって更新されており、活動報告や紹介、また貧困問題や雇用対策に関するニュースを掲載しています。ちなみに、現在は公式ホームページからもリンクが張られています。

他にも、広く野宿者問題についての関心を呼ぶために、テレビ出演の依頼も積極的に受けました。日にちなどは以下の通りです。

表 5.3.1 : テレビ出演・取材について

放送日	番組 (及びテレビ局)
2008年 10月 25日	「一期一会 ーキミに聞きたいー」NHK教育
12月 25日	「スーパーニュース」UHB
12月 26日	「Hana*テレビ」HBC
2009年 1月 24日	「NHKニュース北海道」NHK

5. 4. 総括

今年度の広報活動の主要な問題点は二つあります。

一つは、会報が一度しか発行されなかったことです。本来、当会内部での情報共有をその役割の一つとする会報発行は、より頻繁に行われるべきです。もう一つは、公式ホームページの更新が滞っていることです。当会に関する情報に市民がアクセスする際に、もっとも参照されやすいのが公式ホームページであると考えられるため、更新頻度を増やし、情報の質を高めることが重要なのは言うまでもありません。広報については、昨年度も一度しか発行できなかったことから考えて、広報担当者の責任のみならず、会内での負担分散ができないような人手不足の問題があると言えます。これは後者のホームページ更新の問題とも関係しています。

いずれにせよ、この二点は、来年度において必ず改善すべき課題と言えます。

しかし、一方で会員による講演会の数が多く行われたことは、教育的な意味で広報活動としては成功しています。また、それをきっかけに当会に興味を持って関わるようになった新規スタッフが増えたということは、大きな成果といえるでしょう。

6. 寄せ場交流会の報告

7月12日～13日に岐阜県多治見市で行われた全国地域・寄せ場交流会に参加しました。

年に一度行われるこの交流会では、全国各地からホームレス問題を考えるNPO法人やボランティア団体が集まり、そのなかから選出された各代表者がこれまでの活動を報告します。そして、交流会に集まった人達が問題を共有し合い、社会に潜在する格差や貧困に立ち向かう力を共につけていくことを目的としています。

6. 1. 全体会

1日目の全体会では、報告者がそれぞれ「生活保護の切り下げ問題」や、「ホームレスの自立支援等に関する特別措置法の見直し問題」について話し、地域で奮闘している状況を知るとともに、課題を共有しました。

話のなかで、北海道の実情とは大きく違う現状に驚きもありました。例えば、北九州市における野宿者に対する生活保護適用については、2008年に入ってから少なくとも2件、公園にいながらにして生活扶助が支給されているということです。また、埼玉県のNPO法人「ほっとポット」では、もともとは私たちと同じように「夜回り」を主な活動としていましたが、次第に活動範囲が広がり、現在では空き家の借り上げをし、野宿者に提供しているそうです。そこで活動するスタッフは社会福祉士が多く、その専門性を活かし生活保護申請の付き添いに役立っているようでした。

しかし、ボランティア団体とし身近に感じられる場面もありました。それは、役所の野宿者に対する対応について、話を充分に聞く姿勢に欠けているなど明らかに対応が悪いことがあっても、同伴することで粘り強く交渉し、両者の距離間を少しずつ縮めていく役割をしていくための思いを話していたことです。話を聞き、役所と野宿者の間に立って問題を見つめ、そして両者の架け橋になれるような存在は重要なのだと感じました。

6. 2. 分科会

2日間に渡って行われた分科会では、それぞれのテーマに沿って10人前後のグループに分かれ、各地域の活動の報告や、議論を行いました。

当会では、「医療活動・医療問題」、「ボランティアとはなんだろう」、「労働・失業問題・仕事保障」の3つのテーマに参加しました。

「労働・失業問題・仕事保障」のテーマでは、野宿者の問題に限定せず、貧困の主要因の一つとして、労働組合が日雇い労働と失業とともに派遣労働者などの問題点にも焦点を当て話し合いました。派遣労働者に対する仕事保障などのセーフティーネットはどうあるべきか、という点は現代社会の大きな課題であり、とても勉強になりました。

その他にも、公園からの野宿者排除が推進され始めた大阪の自立支援センターの状況についての報告がありました。そして、東京都内で実施されている野宿者・元野宿者による「仕事起こし」の試み（「あうん」）など、全国さまざまな場所で行われている活動を知り、貧困問題の深刻さを実感すると共に、その問題に立ち向かい行動する人の力強い意志を感じました。

今回の寄せ場交流会で当会の活動を報告する機会はほとんどありませんでしたが、今後参加していくにあたって北海道の現状も伝えていきたいと考えています。

7. 北星学園での学習会

7. 1. 学習会の目的、意図

2008年春から北星学園大学において1,2週に一回、昼休みを利用した学習会を実施してきました。この活動の目的は、当会の活動に参加してまもない学生同士が、定期的に顔を合わせ、話し合う場をつくることで、活動に対する理解を深め合い、また学生同士の交流を深めることにあります。きっかけは、当会の会議に参加していても、内容を理解するための知識を共有していないために、会話についていけず、十分に内容がつかめないという意見があったことです。さらに、普段炊き出しなどの実際の活動に追われ、活動経験を積んだスタッフの知識を共有するという機会がほとんどない、という現状に対応していこうと考えたからです。

7. 2. 学習内容

当初は新聞記事を使用し、当会に関係性が強い社会の問題を広く知ることから始めました。具体的な内容としては、札幌市における野宿者の実態や、生活保護についてでした。生活保護に関しては、すべての野宿者に合う方法であるとは限らない、という視点についても触れました。しかし、就職に必要な住民票を得るために活用し、当人が安定した職に就くことができれば「社会のコスト」という点においても決して高くはなく、なによりも最低限度の生活を保障するものになるのではないかということを話し合いました。

そして、次第に学習会の形態は変わり、7月には拡大学習会をメンバー自らが内容を企画し、進行するようになりました。具体的な内容は「現代社会と貧困」というテーマを扱いました。話の中には、活動経験をもとに考えた野宿者問題を含み、そのような問題に学生が関わる意義を共有しました。この企画は、当会の活動目的はどのようなところにあるのか、という視点を参加メンバーそれぞれが考えるきっかけになったという点でとても有意義な機会でした。

その後は、徐々に寄せ場交流会の報告や、炊き出しの反省・感想、そして夜回りに参加して感じたことといった、より当会に密接した話題が増えていきました。そのため、今年度最後の学習会は、当会をより深く知り、今後活動にどう関わっていけるかを考えられる内容にしようと話し合いました。具体的には、「野宿者支援において利用できる札幌市の社会的資源」をテーマとし、当会が活動に関わるあらゆる機関、そして制度はどのような役割を果たしているのかを知ることを目的としました。市役所、救護施設、ハローワーク、なんもさサポート、勤医協病院、その他支援団体を訪ねて回り、そこで聞いたお話や自ら感じたことを報告すると共に、当会としてはそのような機関とどのように関わっていけるかということについて発表し合いました。

この学習会を機に、それぞれのスタッフが持っている意識や考えを共有し合い、これからの活動に繋げていくことが望めます。それは、これまで抱いていた「何のために炊き出し・夜回りを実施するのか」「何を目的に当会は活動するのか」という思いを徐々に解消していくためにも重要なことです。そして、私たち自身が積極的に学んでいく姿勢を持ち、野宿者支援について考え、活動に繋げていきたいです。

8. 他団体・機関との連携

8. 1. これまでの連携状況

当会が活動をはじめた当初は、北海道にも野宿者がいるということや、季節労働者といった北海道にも関係の深い労働問題が存在するという事はあまり知られていませんでした。そのため、こうした問題への社会的関心も薄く、貧困・労働問題に直面している当事者を支援する団体・機関も少ない状況でした。しかし近年、ワーキングプアの増加や派遣切りなどといった様々な問題が顕在化したことによって、大きく貧困問題が取り上げられるようになりました。

このような社会的状況も受け、北海道においても当事者支援を行おうとする団体・機関が作られるようになりました。当会としても、支援団体や相談窓口などができていることは知っていましたが、情報交換を行ったり、積極的に連携していくというような具体的な活動へは発展せず、それぞれの団体が個別に活動をしているという状況が続いてきました。

貧困問題は労働、経済などの社会的問題や個人的な事情などが複雑に絡み合っています。そのため、「多様な支援策」＝「個別ケースに対応できるようなネットワーク作り」が重要となります。

今後は各団体・機関が連携することで、各団体などが「点」としてだけ存在するだけでなく、特性を生かし合いながら社会の「面」となって支援することができる体制の構築が望まれます。

8. 2. 今年度の連携活動

当会は今年度も、札幌市や札幌司法書士会、NPO 法人ハンド・イン・ハンド、北海道民主医療機関連合会（以下 民医連）、なんもさサポートなど多くの方々に協力していただきながら活動を行いました。炊き出し・相談会にも参加していただき、来場者の方々やスタッフのサポートにご尽力いただきました。

今年度は、上記の団体・機関以外からも情報交換や連携体制の構築についての呼びかけがありました。近年、当会自体も多方面から注目される団体となってきたことが、ネットワーク作りの一歩となる状況を生み出している一因になっていると考えられます。

今年度、「連携」において新たに取り組んだこととして、医療機関との連携があります。以前にも、炊き出しに当会のスタッフの一員として医療関係者の方々に参加していただいていたのですが、最近では以前よりも参加者が少なく、なかなか専門的な相談に対応できずに行きました。そこで、今年度は炊き出し・相談会をこれまで以上に有効に活用したいと考え、2月28日にかでる2・7で行った炊き出し・相談会に札幌司法書士会、民医連、そして新たに北海道勤労者医療協会（勤医協）の方々に協力をお願いしました。当日は相談ブース

を設けるだけでなく、相談員（司法書士、ソーシャルワーカー）の方々にも話の輪の中に入れていただきました。相談を「待つ」だけでなく、炊き出しに来た方々の声を聞き、ともに考える。当会らしさを生かしながら、次への一步となる炊き出しとなりました。

昨年度の総会などでは、連携への具体的な動きはまだなされていないという反省がありました。そうした反省を受け、今年度は以前よりも他団体との情報交換を意識的に行うようにしました。その結果、バラバラであった活動に横のつながりを持つことができるようになりました。

また、今年度はなんもきサポートからだけでなく、救護施設札幌明啓院の方々からも脱路上におけるアドバイスやサポートをしていただき、情報交換や訪問も行いながら連携体制を更に深めることができました。

最後に、連携というわけではありませんが、今年度も、北星学園大学スミスミッションセンターなどの団体からの寄付金や、札幌市地域福祉振興助成金や赤い羽根共同募金の助成金、加えて全国各地の個人からの寄付金も多数いただきました。

多くの方々に支えていただいていることに、深く感謝いたします。

3. 今後について

来年度、当会の課題としては、学生主体のボランティア団体、様々な立場の方々とともに活動できる団体としての特性を生かし、多方面の団体・組織との具体的なネットワークを作る必要があります。より活用できるネットワークを構築することで、一部に負担が集中せず、個別ケースに対応できる支援を行うことができるからです。これは、毎年事務局が交代している当会の弱さを補うという意味でもとても重要なことです。

ネットワーク構築の中で得ることができる情報や技術は、活動する上で野宿者や相談者と向き合うときの大きな力となり、活動を継続的に進んでいくための重要な糧となります。

今後もこれまでの活動で得ることができた多くの経験（知識、人脈）を生かし、また、日頃当会の活動を支えてくださっている団体・機関、その他携わっていただいている方々への感謝を忘れずに活動を続けていかなければなりません。そして、野宿者問題、貧困・労働問題などについて考え、活動する団体として、よりいっそう発展させていきたいと考えています。

9. 来年度以降の展望 －課題の共有など－

「今年度の活動概要」でも書きましたが、今年は当会のような当事者支援活動が、社会のなかでその重要性を増した年でもありました。しかし、そのような状況にあって、当会はどれだけ貢献することができたのか、自問自答せざるを得ない心境です。事務局スタッフは入れ替わるとしても、その課題は共有しておきたいと考えるので、ここに現在考え付く限りの課題を述べておきます。

9. 1. 主体的な参加

まず、「夜回り」の項で述べられていたように、参加人数の増加が運営負担軽減のために機能していないということからは、協力者の増加という状況を強みに出来ない事務局の体制の脆弱さが見え隠れしています。運営体制の強化のためには、参加スタッフ一人ひとりが主体的に関わり、会のあり方を考えていくような姿がもっとも望ましいはずです。そして、そのためには、スタッフが自由に意見交換を行う必要があります。学生団体として出発した当会ですが、社会人のスタッフも増えてきたので、そうしたあり方について、学生・社会人といった垣根を超え、スタッフ一同で考えていくことが、今後の活動を続けていく上で重要であると思われまます。

9. 2. 情報管理・共有

また、情報の蓄積・共有も大きな課題としてあります。当会はこれまで活動してきた中で、様々なことを試み、活動の幅を広げてきましたが、そうした過去の活動の軌跡とも呼ぶべき資料があまり残っていないという問題があります。例えば、過去の会議で話し合われた内容を確認するための議事録の保存や、そうした資料を共有するための方法が決められていないといった問題です（今年度は昨年なかった書記職を設け、議事録の作成を行いました。やはりそれも閲覧方法など、共有する方法が決まっています）。

そうした蓄積がなければ、数年経って事務局スタッフが入れ替わると、また数年前に話し合われた問題が新しい課題のように取りざたされる、といったことが起こり得ます。活動年数が強みに繋がらないようでは、活動のあり方が問われてしまいます。

9. 3. 生活保護、脱・路上生活サポート

そのほかに、「脱・路上生活」を果たした元・野宿者に対するサポート活動が、今年度も全くといっていいほど行われず、十分な話し合いすらできなかったのは依然として大きな課題です。

当会では生活保護の受給を希望する野宿者のために、役所への申請の付き添いを行っており、それによって路上生活を抜け出すお手伝いをしています。しかし、生活保護を申請し、居宅生活を送る事になったとしても、元・野宿者の抱えている全ての問題が解決するわけではありません。野宿という非日常から、急に居宅生活に戻っても、様々な原因から、また路上に戻ってしまうケースが珍しくありません。特に、生きていく上での心の支えのようなものがなければ、(数人だとしても)話し相手がいた野宿状態よりも悲惨な状況になることもありえます。そのため、野宿者の問題は、単なる生活保障の問題に留まらず、人間関係の問題でもあるのです。

そして、最近炊き出しなどで生活保護申請同伴の希望件数が減っているのは、野宿者の間で「生活保護自体に期待できない」と考える人が増えているということも一因として考えられます。そうであれば、当会としてはいっそうそうした問題について考えていく必要があります。

ここでは紙幅の関係で多くは述べることはできませんが、もしこうしたサポート業務を当会で積極的に行うとすれば、前述したような情報の蓄積は大前提となります。路上生活を脱した方の情報などが保存されていなければ、学生スタッフが次々と引退していく状況において、継続的な関わりを持つことは不可能だからです。情報を管理し、共有することが必要というのはここにも影響しているのです。

また、こうしたサポートについて考えた場合、一つ指摘できるのが、社会人スタッフの存在の重要性です。長期的に札幌に住んでいる方であれば、学生スタッフとは違い、脱路上を果たした元・野宿者の方とも継続的に関わり続けることができる可能性が高いからです。そのため、現在「学生主体の団体」として活動している当会が、将来的にどのように運営を続けていくべきかについては、議論してみる価値があると思われます。

9. 4. 事務所について

そして、最後に現在、事務局で話題になっているテーマとして、事務所の話があります。これは、会でアパートの一室などを借り、資料整理や会議、野宿者への相談窓口をもうけることで、活動の拠点を獲得しようというものです。これは、まだ十分な話し合いがされているとはいえませんが、資金面などの課題をクリアしなければいけないのは確かですが、大きな可能性を秘めた案であることは間違いありません。

結成 10 周年を迎える来年度には、こうした課題を共有し、今年度までの反省を踏まえることで野宿者への支援はいかにあるべきなのかについてことが望まれるでしょう。

10. 私と労福会

池内 未希 （北星学園大学社会福祉学部）

私は、労福に参加し始めた頃から月に約 1 回活動に参加する、というような中途半端な関わり合いでしかありませんでした。しかし、去年から事務局次長にさせていただいたことをきっかけに、足を運ぶ回数が増え、少しずつ活動に対する思いも変わってきました。はじめは、「この問題を見てみたい」と思い活動していました。しかし今は、単に“社会問題”として見るのではなく、そこに“人”の存在を忘れてはいけないということを感じています。おじさん達との関わりは、そんな当たり前のことを、実感させるように教えてくれた気がします。そして、労福にいなければ学生の自分が、社会に目を向け生活していくことに対して、意味を見つけることはできなかつたと思います。

それと、もう一つ大きな感謝は、尊敬できる同世代の人達に出会えたことです。これって凄いことだと思います。そういう人達の中に加わって自分も少しは成長できたかと…思いたいのですが、実際にはあまり周囲の人の手助けになれていませんでした。

最後に、活動を通じてそれぞれのメンバーが思いや考えを持ち、それを共有していくことの楽しさを与えてくれる労福が、これからもずっと続いていけばと思います。

『10年ですわ』 小笠原 淳 （フリーライター）

10年も経ちましたね。

なんでもかんでも長く続けることが尊いとは必ずしも思いませんが、労福会の場合は続けること自体を目的としているわけではないので、すこぶる意義のある継続だと思います。何をしているのかよくわからない公益法人が無意味に存続し続けているさまと、ちょうど正反対。毎年、毎日、毎秒、眼の前に次々と現われる問題に真摯に取り組んでいるうち、気がつくと 10 年経っていた。そういうような感じです。いい感じです。

会員の皆さんがほどよくバラバラなのも、またいい感じです。「労働と福祉を考える」なる大袈裟な名前がいかにもイデオロギッシュな響きを醸していますが、蓋を開ければほとんど無色で、全員が各各バラバラな方角を眺めている。「かくあるべし」という重苦しいものが何もなくて、誰もが自分自身の言葉で語っている。歴代事務局長 10 人の顔ぶれを眺めるだけで、そのバラバラぶりは歴然です。まことにいい感じです。

次の 10 年も頑張って続けてくれ、とは申しませんが、ありがちな言い回しで面目ありませんが、このような活動が必要なくなる日がやってくるに越したことはない筈です。早いところ健全な若人に戻って女の尻を追いかけるなり男に騙されるなり博奕で親の身上を潰すなりお酒で人生を棒に振るなり、正しい青春を全力で謳歌したまえ、と言いたいところな

のですが、残念なことに浮き世はますます皆さんの力を必要とする方向へ驀進しています。節目の本年もまた、あまり軽やかに10周年を祝うような空気ではなさそうです。

世の中があまりいい感じではない時代は、いい感じの皆さんに一肌も二肌も脱いで貰うしかありません。どうぞこれからも一丸となって、バラバラに、全力で、力を抜いて、生真面目に、ふざけ半分で、我を忘れて、一歩引いて、何かをやったりやらなかったりしてってください。そのうち、あっという間に20年経ちますから。

大滝 雅史 (北海道大学文学部)

僕が事務局長になって一年間が経ち、僕の事務局長としての期間は早くも終わりを迎えました。

あっという間だ。

なんだか、労福会について思うことを書けとか言われても、何を書けば良いのやら…という感じで戸惑ってしまう。言いたいことはたくさんあるし、思うことはホントに数え切れないほどあるけれど、「どうしてもこれだけは伝えたい！」ということは思いつかない…なぜだろうか。

去年の資料ではあまりおめでたくないような、どちらかといえば暗いことが書いてあったので、今年は明るいことを書こうと思ったのだけど…どうも調子がふるわない。

そもそもこんな筆致が重いのは、総会の作業をやっていて晴れやかな気分でないからかもしれない。「一年間お疲れ様でした!」「ありがとうございます!」とか、そんなことを書いたって構わない。それで済むなら話は簡単だ。でも、そんな言葉で終わるようなものでもない。

というか、終わりって何だ?僕が事務局長を辞めようと、活動から遠ざかろうと、札幌を離れようと、野宿者はかわらずそこにいるのだ。

どこに終わりがあるのだろうか?

僕が、今年度一年通して活動して、その中で思ったことは、残念ながら「野宿者の継続的な支援を考えたら、やはり学生団体として行うことには限界がある」ということだった。もちろん、労福会には学生・社会人両方が関わっている多様性がある面白いいし、学生なりの強みはあるかもしれない。でも、やっぱり疑問を持ってしまう。

「これでいいのかな」と。

学生だからそう考えるのかもしれないし、社会人の方からすれば「学生団体であること

に意味がある」というのかもしれないけど、うーん悩ましい。答えは出でない。でも、社会人の皆さんに言いたい。「学生団体でやってるのに社会人がでしゃばっちゃまずいかなと、思う」みたいな意見がありますけど、一緒に活動する機会も増えるわけだから、学生としても刺激になるし、活動のパートナーになるなら、大人も子どももないと思います。まあ主観だし、考えは変わるかもしれないけど、今はそう思います。

で、深刻ぶったから（心配されないように）捕捉して書くと、僕はもともとマジメな人間なんです。でも、それを自分で分かっているからこそ、意図的に、適当に物事を考えるようにしているのです。なぜなら悩みすぎると、悩むことが自己目的化するから。それはいわば、「負の自己満足」で、自分を含めて誰も幸せにならない、と思っています

つまり、「深く考えすぎても仕方ないじゃん」という態度で生きる事にしているのです。それで、いい加減なくらいで生活していればちょうどいいのだけれど、たまには物事に悲観的になってみるのも悪くないかな、ということでやってみたのです。はい。

でも、本心を書いていることにはかわりありません。野宿者支援は、答えが出ないし、終わりが無い。とても大変。でも、だからおもしろい、と思う。というか言いたい。

で、冒頭のところで否定的に書いていたけど、みなさんに支えられてやってこれたのは事実なので、一年間ありがとうございました！ということは書いておきます。（別に「これでもう労福会に関わるつもりはない」というわけではありませんが）、労福会に関わったおかげで貴重な経験をさせてもらいました！なんというか社会経験って言うやつですね。

それと、「遊」の反貧困プロジェクトについて、総会資料内で触れようと思っていたのですが手違いでできませんでした。この場を借りてお詫びいたします。ごめんなさい。

澁谷 洋平 （北星学園大学社会福祉学部）

労福会の活動に参加して6ヶ月が経ちました。自分の活動を振り返ってみると色々と思いつき返すことができました。

私と労福会の出会いは9月の炊き出しでした。サークルの後輩が企画担当をやるということなので参加してみました。参加した最初の印象は、炊き出しに来る野宿者の数に衝撃を受けたことです。思ってもいない数に驚きました。野宿者と話してみても、すごく親しみやすく、話しやすいと感じました。そして、参加スタッフの温かさに心が魅かれました。しかし、人見知り、話すことが苦手な私は、どうやって話しかけようかと戸惑っていました。正直、「私はこれから続けていくことはできるのか」と思っていました。数を重ねることにより、徐々に慣れてきて、自分から話しかけることができるようになりました。

労福会と本格的に関わり出したのは、炊き出しの企画担当を任されてからです。2回しか

炊き出しに参加していないのに、3回目で企画担当は不安でいっぱいでした。いろんな方々に助けをもらい、何とか良い形で終わることができました。準備していく過程、当日の指揮、他団体との連携など、さまざまなことを一回で経験することができました。不安と戸惑いで押しつぶされそうになったけれど、終えた後の達成感は、自分のプラス作用として、残しておけるものだと思います。何事も経験と行動力が大切だと思います。

活動に参加して私は、2つの喜びを見つけました。1つ目は、野宿者の方々に名前を覚えてもらい、呼んでもらえたことです。夜回りで会う度に、「澁谷君、こんばんは。」と言われ凄く嬉しくなります。自己満ではありますが、自分なりの喜びを見つけるのも良いのではないかと思います。もう一つは、「ありがとう」の一言を聞けることです。その一言を聞くだけで嬉しくなります。日常においても「ありがとう」の一言は、大切な言葉です。その言葉を聞いて、初めて支援が完了すると思います。その一言が聞けないと一方的な支援で終わり、ニーズには応えることができていないと思います。双方向の思いが交差して1つの支援が完成すると思います。

労福会には色々な人たちがいます。社会人もいますし、いろんな学校の学生がいます。色々な意見や考え方があるのは当然です。なので、意見の不一致や考え方の差異によって、すれ違いが起こることもあります。そのような問題がありますが、私は様々な意見や考え方があることを重宝しています。色々な話を聞くことができるからです。自分の考え方だけでは幅の狭い考えでしかないと思います。他の考えを聞くことによって、自分の考えの幅が広がります。色々な考え方があるからこそ色々な可能性があるのではないのでしょうか。なので、いろんな話を聞き、自分の考えを広くしていきたいと思います。

労福会に出会えたことで、自分が成長できている気がします。まだまだ未熟者ですが、これからも積極的に関わっていききたいと思うので、どうぞよろしくお願いします。

世良 迪夫 （北大大学院 情報科学研究科 修士）

あー。労福は変わったなあ。というのを最近は特に思います。

もちろん、僕が労福に関わるようになってから5年も経ったので、変わっているのは当たり前なことなのですから。

今年度の事務局のメンバーは労福を立ち上げた頃の人たちとほとんど会っていない人が多いので、余計にそう思うのかもしれない。

思い返してみれば、僕も先代の事務局メンバーから色々な知識や「思い」を教えられました。

言葉にできないような教えられたそれらを、引き続き後の労福にも伝えていきたい。そう思いながら今年は参加していました。

そのせいか、会議では「昔は～だった」をかなり連発していたように思います。

昔のことを伝えていきたいのはやまやまなのですが、発言しつつそれはそれで無理に伝え過ぎてもよくないなあ。とも思っていました。

今と昔は周りの状況も労福の活動自体も違います。

昔やったことに影響を受けすぎて、あまり考えることなしに同じようなことをしていても、活動の意味は薄れてしまいます。

むしろ、長く居過ぎたせいで考えが凝り固まってしまった人のことは置いておいて、新しい人の新しい考えでもっと労福の幅を広げて欲しいなと期待していたりもしました。

実際、今年は変わったなあ、と思うわけで、労福の幅が変化した表れでもあるんでしょうね。

相変わらず総会資料のまとめ作業に僕が関わっているぐらいな慢性的な人手の少なさは変わっていませんが。

『夜回りの先。』 都築 仁美（NPO法人さっぽろ自由学校「遊」）

2008年度、私が所属するさっぽろ自由学校「遊」では、労福会に協力いただいて「反貧困プロジェクト」に取り組みました。その中で労福会の活動内容について伺ったり、炊き出しや夜回りに参加させていただくなどしました。

以下の文章は、その経験を通じて考えたこと、感じたことを記したものです。別な所に掲載したのですが、「私と労福会」が拙いながらも表現されているのではないかと思います。



5月からはじめた「反貧困プロジェクト」。大切にしようと考えていた取り組みなのに、他のことで忙殺されていたこともあり足踏み状態。今年度は毎回参加すると決めていたろうふく会（北海道の労働と福祉を考える会）の「夜回り」も、1月中旬から2月上旬にかけて、3回ほど続けてお休みしてしまった。

「夜回り」では、奇数週の土曜日に、主に札幌の中心部を、野宿者の方々に声をかけながらあるく。顔なじみの人には、体調を聞いたりするほかは、一緒に四方山話をしたりする。「夜回り」を待っていている人もいて、元気そうな声で挨拶が交わせるとうれしい。

初めて、顔を合わせる人には、生活保護をすすめてみたりする。でも、ここはノウハウのない私には役不足、という気持ちがあって、ろうふく会の運営の中心である年若き先輩である学生たちにお任せしてしまう。躊躇なく（と私には見えてしまう）、支援を引き受ける学生達は、戸惑いばかりで先へと踏み出せず、よって経験を積み重ねられない私と比べると、身軽ではるかに頼もしい。関わるようになってから1年。その短い期間にどんどん

成長していく。自分よりもはるかに年若い彼らを「すごいなあ」と思える自分が、ちょっと嬉しく、もどかしい。

春になったら、もう少ししっかり、この活動に首を突っ込みたいと思っている。でも、「夜回り」で顔なじみの野宿者の方と繰り返し顔をあわせる度に、同じ会話を繰り返す自分の無力さを問わずにはいられないし、無力さを嘆く自分の傲慢さを晒わずにはいられない。止めてしまうのが一番らくだけれど、それはできないし、したくない。多くの人に出会い過ぎた。この出会いを大事にしたいし、この悩ましいキモチのもう一歩先をのぞいてみたい。（「遊」HP2009年2月23日の事務局日記より）

長田 康幸 （北大法学部）

まだ4カ月しかたっていない・・・。

私が労福会の活動に参加し始めたのは11月29日の炊き出しからだ。まだまだ新人の域である。野宿者の支援についても知らないことが多いし、生活保護についても勉強不足なことがたくさんある。しかし、それにもかかわらず、初めて参加してからかなりの時間がたった気がする。

休学中の大学4年から参加した私は、それまでの大学生活でももちろんホームレスの方にかかわる経験などしたことがなかった。大通駅でホームレスの人をよく見かけてはいた。この人たちがどんな生活をしているのか興味関心はあったが、若干話しかけるのに怖さもありいつも素通りしていた。休学中何かしなければと思い北大のボランティア支援室に行ったとき労福会の掲示を見つけた。これはチャンスだと思った。

11月の炊き出しで初めて労福会に参加した。しかし、特に誰からのつてもなく単独で飛び込んで行ったようなものだったので、このときはどうすればよいのかかなりとまどった。2,3人の野宿者の方と話した。外見や話し方は普通のどこにでもいるようなおっさんばかりだった。ただ、話の内容は深刻だった。炊き出しを終えた後、私の中に現実の社会問題に対峙するという新たな自分が加わったような気がした。

それ以降も会議や夜回りなどにできる限り参加している。最近やっと労福会の抱える課題などもわかってきた。経験不足な私には毎回の会議や夜回りは得るものが多くある。労福会に参加することで登場した新たな自分は着実に経験を積んできている。4カ月前とは比較にならない。それだけ内容の濃い期間だった。

最後に私が労福会の活動を続けられているのも大滝君をはじめとする学生の方や、社会人の方、さらには野宿者の方の親しみやすさのおかげです。とても感謝しています。では、みなさんこれからもがんばりましょー！

中村 江里加 （北大法学部）

昨年の 8 月に労福会に関わり初めてから、これまで、多くの活動に参加させてもらいました。昨年を振り返ると、労福会に参加したことで充実した一年を過ごすことができたと思えます。どこがどのように充実していたのかというと、いい意味で非日常的な経験をさせてもらったこと、様々な職業の人たちや様々な個性をもった人たちに会えたこと、新しい経験から学ぶこと・考えさせられることが多くあったということ、そして何より他では知り合えないような友人ができたということ挙げることができます。

労福会の活動に参加する人たちは、何かのきっかけで、それぞれの目的や理由を持って来ているのだと思います。このように、各方面各世代の多様な人たちの接点となる「労福会」とは、何度考えても不思議なものです。

私はもともと労福会が行っているような野宿者支援に的を絞って、関心を持っていたわけではありません。はじめはもっと漠然と、社会のマイノリティや社会的弱者が自力でどうにかすることができない困難な状況にありながら、マイノリティ・社会的弱者であるがゆえに社会から理解や支持を得づらいう意味で二重に困っているところで、誰がどのように手助けしていくのかという問題を問題として認識していました。このような社会問題を突き詰めて考えてみたい、「“よくない”と思うから問題である」では終わらせたくない、という思いがありました。そこで、手助けの主体はボランティア団体や非営利法人だろうと当たりをつけて、札幌市でそのような団体を探していたところ労福会に辿り着きました。社会一般の利益や価値観を実現する営利的企業や行政の外に立つボランティア団体とは、どのように活動しているのか、どのような課題を抱えているのだろうか。実際に会の一員として行動するようになるまでの経緯は、先に挙げたよう疑問を抱いていたら、事故に遭うようにバタンとぶつかり、巻き込まれ、いつの間にかここまで来たというものであった気がします。つまり、まさか今のように労福会と関わるなどと予想していなかったし、今日までの時間はあっという間に私の前を駆け巡って行ったという具合です。

しかし、労福会の活動の中では、私の問題意識などすっ飛ばして、新しい友人を作ることを楽しみ、野宿者支援という新しい毛色の問題に引き付けられ、正面から向き合っていました。

ここまでぐちゃぐちゃと述べてきましたが、一言で、自分の行動が自分自身だけでなく社会にも還元されるところが、労福会の魅力であると思えます。

成田 允子 （市民ボランティア）

昨年春から地方勤務となり、週の半ばを地方で過ごすようになりました。帰札して自宅への道すがらは、つつい彼らの姿をさがしています。いつもの場所にいつもの顔があるとほっとし、姿が見えない時は体調が悪いのか・・・タバコでも吸いに行っているのかと・・・

まるで母親のような気分になってしまいます。

また、顔見知りの彼らに、「久しぶり・・・」「帰ってきたの・・・」などと声を掛けられると、家族に言われたかのような気分になってしまいます。

100年に1度と言われる世界的な経済不況の中、ワーキングプアと呼ばれる生活保護水準以下で暮らす家庭は、日本の全世帯のおよそ10分の1、400万世帯とも、それ以上とも言われています。

このような状況では、社会的弱者の彼らがもろに影響を受け、職を失いホームレスにならざるをえないのもしかたがないことなのでしょう。

ホームレスになってしまった人たちは、いつまでもこのままでいいと思っているわけではなく、何とかこの状況から抜け出し、昔のように普通に働き普通に暮らしていきたいと強く望んでいると思われます。

しかし、少ない雇用機会や専門的な技術訓練の不足、身体的、健康上の問題、心理的な問題などが障害となりなかなか現状から抜け出せないでいます。

私が一番気にかかるのは、長年（数年から十数年）に渡りホームレスを続けている彼らのことです。

ベテラン？の彼らは「今の生活が気に入っている」「今のままで困ることはない」などと言い、なかなか手ごわい相手です。役所は「彼らは社会生活を拒否している」とも言います。

本当にそうなのでしょうか？ぐっすり安心して休める場所がなく、次にいつ食事が摂れるのか分からず、通行人やガードマンに嫌がらせを受け、心休まる時は無いように思われます。

こんな彼らの根底にあるのは強い人間不信であると思います。

働いても、働いても豊かになれない。どんなに頑張っても報われない。家族や友人に恵まれず、誰も自分を必要としてくれない・・・そんな生活が彼らにやる気を無くさせ、せつな的な生活に馴染み、社会に背を向けて生きて行く他道は無くなってしまったのではないかと思います。

彼らが、人としての尊厳を保ち、自分は社会が必要としている人である事を実感できる事が一番大切だと思います。

労福会の私たちが出来る事は、お金でも物でもなく、「いつも気にかけているよ・あなたのことを心配しているよ」という人としての繋がりだと思います。炊き出しで出会った人が、普段はまるで自分の存在は無いかのように通り過ぎて行く…そういうことに彼らは深く傷ついています。別に長々と話す必要はなく、知っている人として挨拶するだけで良いのです。

私たちは、多くの人々とホームレスに対する理解と認識、情報を共有することが必要です。その中から、出来る人が出来る事をして行くことがこの活動を継続させ、支援と支持を得る大きな原動力であると思います。

『運動としての視座を』 細谷 洋子（NPO法人さっぽろ自由学校「遊」）

時間もないし、学生主体の活動なのにあまり口を出すのも…というためらいはあったが、提案やら気になっていることがあるので急遽参加することにした。不適切な表現や説明不足の点については、追って補足・お詫びの機会をいただければと思う。

■「労福会」あるいは「ホームレス問題」との出会い

さて、「私と労福会」と言うよりも、「私とホームレス問題」あるいは「私と札幌の貧困問題」と言ったほうがいいかもしれない。2003年に新聞で椎名先生たちのホームレス支援調査活動の記事を読むまで、厳寒の地札幌にはホームレスはいないと思っていた。椎名先生には、一度「遊」でお話しいただいたこともあり、認識不足は多少修正されて強い関心は持ちつつ、どんな関わりが可能なのか、何ができるのか、何をすべきなのか…などと考えながら日々の忙しさに追われて一步を踏み出せないままにいた。

具体的なかわりのきっかけは、ビッグイシューの販売に「遊」の協力を求められたことだった。数ヶ月というような期限のある協力ではない、週に3日、ずっと継続してという協力には、反対の声はないものの「遊」の運営に支障をきたさないかという不安の声もあった。有志で卸し対応チームをつくって協力することにしたが、多少の無理をしながらでもビッグイシュー販売サポートに直接関わったことは、私にとっても「遊」にとっても（多分）有意義だったと感じている。ホームレスや貧困をめぐる問題が抽象的なレベルからよりリアルな具体的な問題として捉えられるようになった。そしてそれは、ビッグイシュー販売サポートのスタートをきっかけに夜回りや炊き出しに参加するようになったことによって、さらに現実的・具体的な問題になってきていると思っている。

■路上生活を支援するのではないということ

MLや個人的な話の中で、「労福会は脱路上を支援するのであって路上生活の継続を支援するのではない」ということが何度か出てきた。段ボール・ハウスやテントで寝る暮らしが人間的だと思いますか、と言われて何もいえなかったこともある。

しかし、現実には路上で夜を過ごす人たちはたくさんいる。札幌の現状では、脱路上を果たすには生活保護を受けるか、仕事をしてアパート入居資金をためられるケースがごくまれにあるだけだ（ビッグイシューの販売でアパート入居を果たした人が出たのは本当にうれしかった）。炊き出しの際の労働相談や生活相談を受ける人がきわめて少ないこと、生活保護申請へのハードル、「生活保護を受けたって仕事探せ仕事探せと言われて、どうせ半年後には切られるんだから」という声も何度か聞いた。

夜回りの際に、「このままでいい」という人たちの言葉を鵜呑みにしないで、どうい

思いでそう言うのかを丁寧に聴くこと、という注意がされたことがあったが、本当にそう思う。生活保護に対する抵抗感がある場合や、孤独なアパート生活や金銭管理などに何度か失敗してどうせ長くは続けられないとあきらめている場合など、さまざまな事情から生活再建の希望や意欲を失ってしまっているのだろうか。

だが、脱路上をめざして、権利として生活保護を申請できるようになるにも、人間関係をつくり生活技術を身に付けて新たな生活をイメージしたり準備をしたりするにも、それなりの時間が必要な場合も少なくないのではないかと感じている。再路上になったという人たちに会うたびに、もっとゆっくり準備する時間があったらと感じてきた。迷ったり悩んだりする間、せめて雨風をしのげる場所で眠れるような支援（シェルターの設置や公共施設・公園・地下通路などの開放）が必要ではないだろうか。

また、東京代々木公園のテント村や隅田川河川敷のテント村の住人や支援者が書いたものを読むと、ある種のコミュニティとして機能しているようにも思う。過労自殺するくらいだったらここに来ればよかったのに、というテント村の人たちの言葉には一面の真実があるように思える。野宿者コミュニティには、この競争社会とは違う何かがある、と言ったら、感傷的過ぎるだろうか。テントや段ボール・ハウスで寝る暮らしが人間的な暮らしだとはいえないにしても、生涯とか何十年もテントで暮らすというのではなく、人生の一時期の受け皿として、そんなコミュニティがあってもいいのではないかという気もする。

労福会として、冬季シェルターの設置や公園、地下通路の開放などの運動にとりくめないかとずっと思っている。

■めざす方向性

支援団体と一口に言っても、チャリティ型、事業型、運動型など、そのめざす方向性によって具体的な活動内容は少し違ってくる。労福会は運動型だろうと私は思っていたが、どうもそうではないのかもしれないと思うことが多くなった。方向性が見えないのだ。

隔週の夜回りや年数回の炊き出し、概数調査をし、学生たちは学内では得られない経験をして社会に出て行く。何人かは、緊急のSOSに対応したり生活保護申請に同行したりしているが、どうも組織的に対応できる体制になっているようにも思えない。この方向性の曖昧さが、調査や炊き出しの際の参加者の募り方や断り方にも影響しているのではないかと感じている。

こうしたことについて、総会で話が聞けたらと思っている。私自身は、運動としての方向性と視座を持つべきではないかと思っているのだが。

■他団体との連携のあり方

なんもさサポートをはじめ、ハンドインハンドや司法書士会など、他の支援団体と連携協力し合いながら炊き出し相談会を実施しているのは知っているが、その連携協力のあり方もよく見えない。そもそも炊き出し相談会の主催団体はどこなのだろう。労福会主催で、

他団体に協力してもらっているのか、あるいは共催なのか、共催ならどこかで全体会議を持って段取りをしているのか、とにかくよくわからない。

こうしたことがわからないのは私だけなのか、会員にシェアするしくみはどうなっているのか、これについても総会でしっかり聞きたいと思っている。

松浦 聡美 （北星学園大学社会福祉学部）

実際、ボランティアに参加し続けるのって大変だと思うんです。交通費はかかるし、バイトは休み取らなきゃならないし（執行部の人はずっと大変ですけど）。それなのに、「どうして私は労福会を続けているのかな」と考えます。大学に入ったら何かボランティアをしたいとは思っていたけれど、ホームレス問題に特別関心があったわけではありません。そして今でも、正直なところ、「ホームレスの人を助け出したい！」という衝動に駆られて行動しているとは思えません。もちろん、こうしている今も寒さの厳しい路上で生活している人がいるのかと思うと、胸が苦しくはなります。でも、それが活動を継続している動機と直結するのかといたら、違う気がします。

じゃあなんなんだと突き詰めて考えると、「わからないことがたくさんある」ことが、労福会を続ける1番の理由になっているんだと思います。

初めて夜回りに参加したとき、「こんばんは」とホームレスのおじさんに声をかけて、普通に「こんばんは」と返ってきたことに驚きました。憎くないのかと。こっちは帰る家もあるし、毎日3食きっちり摂っているような人間なのに、恨まなくていいのかと。私はもっと、睨まれたり無視されたりするものだと思っていました。それなのにホームレスのおじさんは、笑顔で私たちと会話をしてくれます。そのことが不思議に感じられました。

「どうして笑顔になれるんだろう？ 私たちのこと、少しも憎たらしいと思ってないのかな？」と気になって、次の活動にも参加しました。数回活動に参加すれば、疑問は解決されると思っていました。しかし予想とは裏腹に、活動すればするほど、気になることがどんどん増えていきました。「炊き出しに来るおじさんの数が50人って、少ないの？」とか、「ビッグイシューって何だろう？」とか、「札幌市のホームレス支援策ってどんなの？」とか。少しずつ勉強して、わからないことを1つずつ減らしていこうとはしているけれど、わからないことはなかなかなくなりません。

だから、来年度も労福会のお世話になります。よろしくお願いします。